

## 第12回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21657>

---

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 12, 1987-10-26. 九州大学教養部  
バージョン：  
権利関係：



## 第12回合宿共同授業を顧みて

九州大学教養部長 立 田 清 朗

昭和62年度九州地区国立大学間合宿共同授業は、「地域からの視点」というメインテーマの下に、九州各大学から教職員・学生百十数名が参加し、九重共同研修所にて実施された。

今年度から、従来二分校制で実施されていたものが、各大学から少人数の学生しか参加できないがより充実した内容にしたいという考えから、一校制をとり実施したわけである。この趣旨に見合う成果がえられたか否かは期間中の学生の反応だけでは速断できないが、一応各企画について振り返ってみたい。

講義については、今回比較的若い講師の方々が集まり、非常に活気溢れるものであった、特に、いわゆる大学紛争時に育った世代の方々が多く、それぞれユニークな講義が行なわれたというのが私の実感であった。果たして、学生はどのように受け止めたのであろうか。またフォーラムにおいては大学関係者以外から版画家の木村先生および毎日新聞の篠原先生を迎え、それぞれの御経験に基づいた話と助言をいただき、さらに討論の場でも学生と丁丁発止とその気骨ある若々しい議論を展開され、この合宿共同授業全体を盛り上げていただいた。

学生諸君からのアンケートをみると、講義やフォーラムについて一様に高い評価が与えられている。しかし、討論の時間が少なかったとの不満もあった。ただ、私の立場から言えば、討論の時間が設定されなければ討論ができないというのは甘えではないかと言いたい。自由討議時間も可成りあるわけだし、先生を引っ張り込んででもという学生諸君の気概が欲しいと思うのは無理であろうか。

懇親会については、これまでと同様に、今回もまた失望した。大学生の自主的企画はテレビ番組等の模倣にしかたよれないというのではいささか寂しい気がする。今後その在り方に検討を要するだろう。

九重登山は、幸運にも雨にたたれる前に無事終了し、学生にも楽しみの一つがかなえられ満足したと思われる。

全体として、この合宿共同授業が益々実のあるものとなるためには、一般的に言えることではあるが、学生が受動的な態度から積極的に学ぶ姿勢に転じる必要があるだろう。このため企画する側にとってもその環境づくりが当面の課題になると考えられる。

最後に講師の先生方、各大学からの引卒教官及び事務室の方々の全企画への御助言、御協力に深く感謝致します。

# 1. 第12回九州地区国立大学間合宿共同授業 実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食を共にしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「地域からの視点」
3. 主管 九州大学教養部
4. 当番 九州大学教養部
5. 会場 九州地区国立大学九重共同研修所  
大分県玖珠郡九重町筋湯〈TEL 09737-9-2617〉
6. 開催期日 昭和62年7月11日(土)～7月15日(水)の4泊5日
7. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生（教養部を置く大学は教養部学生）で当該大学が指定する者
8. 募集人員

|          |     |
|----------|-----|
| 福岡教育大学   | 5人  |
| 九州大学     | 15人 |
| 九州芸術工科大学 | 5人  |
| 九州工業大学   | 5人  |
| 佐賀大学     | 10人 |
| 長崎大学     | 5人  |
| 熊本大学     | 10人 |
| 大分大学     | 5人  |
| 宮崎大学     | 5人  |
| 宮崎医科大学   | 5人  |
| 鹿児島大学    | 10人 |
| 琉球大学     | 15人 |
| 計        | 95人 |
9. 日程 別紙日程表のとおり

## 10. 講義・フォーラム題目等及び講師

### ○講 義

- |                                                                    |            |      |
|--------------------------------------------------------------------|------------|------|
| (1)「情報と地域社会」<br>ーバリ・ヒンズー教寺院の創立記念祭<br>(オダラン)のマルチメディアデータ<br>ベースシステムー | 九州工業大学教授   | 打浪清一 |
| (2)「アジアの中での九州の植生の位置」                                               | 鹿児島大学助教授   | 鈴木英治 |
| (3)「地域と産業」<br>ー九州における財政赤字と内需拡大型<br>産業についてー                         | 熊本大学       | 田中廣滋 |
| (4)「ジョージ・オーウェルとヘンリー・ミラー」                                           | 九州芸術工科大学講師 | 北村賢介 |
| (5)「地域と高齢化」                                                        | 宮崎大学助教授    | 辻正二  |
| (6)「九州地域の自然」                                                       | 琉球大学講師     | 前門晃  |

### ○特別講義

|              |             |                 |
|--------------|-------------|-----------------|
| 「竹細工職人の芸と思想」 | 宮崎医科大学外国人教師 | ロバート・<br>J・アダムス |
|--------------|-------------|-----------------|

### ○フォーラム

|          |                             |      |
|----------|-----------------------------|------|
| 「九州とアジア」 | 基調発題者：版画家、福岡県ユースホテル<br>協会会長 | 木村晃郎 |
|          | 毎日新聞取締役・論説委員<br>西部本社編集局長    | 篠原治二 |
|          | 九州大学助教授                     | 陣内正敬 |
|          | 司会者：九州大学教授                  | 福留久大 |

### ○登 山

|               |      |
|---------------|------|
| 指 導 者：大分大学助教授 | 前田 寛 |
|---------------|------|

## 11. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費(8,500円)を添えて申し込むこと、ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。
- (2) 当該大学は、参加学生名簿及び教職員滞在計画書を5月30日(土)までに当番校あてに送付すること。
- (3) 参加費は、大学毎に一括して第1日目に会場で払い込むこと。

## 12. 参加費(食事及び雑費)

8,500円(7月11日夕食から7月15日昼食まで)

## 13. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、名大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

#### 14. そ の 他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、登山靴又は底の厚い運動靴（履きなれたもの）、登山帽、雨具（折りたたみ傘とポンチョ又はビニールガッパ）、水筒、ジーパン（女子）、健康保険証（コピー）、日常使いなれた薬など。
- (2) 集 合 参加者は、各大学毎にまとまって、7月11日(土)午後4時までに会場に集合すること。
- (3) 解 散 7月15日(木)午後1時に現地で解散するが、参加者は借り上げのバス及び船舶で各大学まで輸送する。

## 昭和62年度

— 6 —

## 2. 第12回九州地区国立大学間合宿共同授業 講義要旨

### ① 情報と地域社会

ーバリ・ヒンズー教寺院の創立記念祭(オダラン)の

マルチメディアデータベースシステムー

打 浪 清 一 (九州工業大学)

大阪大学創立50周年記念行事の1つとして南太平洋学術調査交流計画が1985年に実施された、私は文学部の人達とインドネシアのバリ島の田舎の古くから行われているバリ・ヒンズー教寺院の創立記念祭を調査し、ビデオ、写真、録音、記録メモ、報告書と多角的に記録を取った。最近バリ島は観光地化し、古くからの風習がすたれつつあるのでこれを記録に残すためである。

これらマルチメディアデータを抄録、原情報と抄録をデータベース化し、写真、映像、登場人物、場所など各種条件から検索し、該当映像などを呈示できるシステムを構成した。このシステムでは、マルチメディアデータの中に記録された、同時平行的に行われた幾つかの境内での行事を把握し、祭の儀式などの調査分析や、宗教的な意義を解明することが出来る。

地域に伝わる伝統行事の紹介と、それを記録、管理する情報システムについて紹介する。

### ② アジアの中での九州の植生の位置

鈴 木 英治 (鹿児島大学)

北緯46度から24度の間にひろがる日本には、およそ4,000種の顕花植物が分布している。その南半の34度以南を占める九州にも、さまざまな種類が見られるが、屋久島より北は、中国からネパールに類似した種が多い日華区系に属し、その南はインドシナ半島と類縁性の高い東南アジア区系に属する。

九州には、亜熱帯から冷温帯までの植生が分布する。屋久島以南の亜熱帯低部には、海流によって種子を伝達する熱帯性植物が多いが、内陸部の優占種は、シイ、カシなど九州本土の照葉樹林と共通性が高い。暖温帯の照葉樹林は、朝鮮・中国南部に似た植生があるが、アジア以外の地域にはない。

暖温帯上部から冷温帯下部に広がるモミ・ツガなどの温帯針葉樹林は、日本国内では西部の太平洋側に限られるが、台湾・中国・ネパールへとひろがっている。冷温帯のブナ林には、日本の固有種が多くみられる。

### ③ 地 域 と 産 業

—九州における財政赤字と内需拡大型産業について—

田 中 廣 滋（熊本大学）

現在の日本経済は、大幅な貿易黒字による貿易摩擦あるいは、その一つの帰結として円高の問題に直面しています。この難問への有効な対策として、輸出依存型から、内需充実型への産業構造の変換が、国の内外から求められています。ところで、この内需拡大を推進する政策の実行が困難である原因の一つに、財政赤字があります。財政赤字のもとでの地域振興策では、従来の財政主導型の政策の実行が困難ですので、民間活力や規制緩和などの政策が中心となります。これらの政策では、民間の経済活動が活発な東京など特定地域に集中する産業構造が引き起こされる可能性があります。このような関東地域では繁栄が予想されるのに対して、九州においては、内需拡大の産業構造とは何を意味し、政策面で、財政赤字は地域社会にどんな影響を与えるのかを考えてみよう。

### ④ ジョージ・オーウェルとヘンリー・ミラー

北 村 賢 介（九州芸術工科大学）

オーウェルはミラーの文学を高く評価したが、二人の文化論、政治論、広くは人間観には本質的な相違がある。則ちミラーの思想の背景にはコスモポリタニズムがあるが、オーウェルの思想は深く英国というヨーロッパの一地域に密着している。

1930年代、40年代というヨーロッパの激動期に、愛国心、ナショナリズム、戦争と平和等の問題を廻り、二人は思想的に相反する立場を取る。

オーウェルの頗る優れたミラー論である「鯨の腹の中で」と、ミラーの恒久平和論である「殺人鬼を殺せ」を中心にあげ、コスモポリタニズムの肯定と否定という観点から、オーウェルとミラーの思想を比較する。

## ⑤ 地域と高齢化

辻 正 二（宮崎大学）

21世紀のわが国は、高齢化社会の問題に直面するといわれている。65歳以上の人口が、今日、10.3%（昭和60年の国勢厚査）をかぞえるが、2021年には23.6%にまでになるという。つまり、4人に1人という全く経験したこともない超高齢・長寿社会が到来するということである。

ところで高齢化の問題は、わが国が同じ時間的推移でもって直面する問題ではない。九州の場合、鹿児島や大分や宮崎などではすでに高齢化がかなり進んでいる町村がある。

今回の講義では、高齢化の進行を地域の産業構造と世代別（高齢者と成人）の意識の点から、地域のかかえている高齢者問題としてみるが、ここでは特に、宮崎県内6地域（8地点）で実施した高齢化調査結果を素材として、山間地域、漁業地域、商業地域、新興団地、旧市街地などで、現在直面している高齢者問題を検討したい。

## ⑥ 九州地域の自然

前 門 晃（琉球大学）

九州地域の特徴的な自然として、(1)九州における火山、(2)琉球列島における熱帯地形、があげられよう。

九州の火山は現在も過去においても活発に活動し、その活動によってもたらされた火山噴出物は広域に堆積している。火山活動は大きな災害をもたらすと同時に、その噴出物は地域の生活に多大な影響を与えている。

一方、琉球列島にはサンゴ礁・熱帯カルスト・マングローブ河川などの熱帯地形が発達する。これらの地形は、琉球列島がわが国の南端に位置するため、気候に関係して形成されたものと考えられる。

九州広域に分布する火山噴出物の噴出源・噴出時期・分布・性質・侵食、熱帯地形の分布・特性・成因にスポットをあて、九州・琉球列島・諸外国を対比しながら実例をあげて解説する。

## ○特別講義「竹細工職人の芸と思想」

ロバート・J・アダムス（宮崎医科大学）

宮崎県高千穂町の近くの日之影町に住んでいる竹細工職人、広島一夫さん（72才）の芸術をスライドで紹介して、昔からの伝統を続けている人の考え方を説明したいと思う。

そぼくな材料を使って、美しい籠を作っている広島さんの価値観はわれわれに大切な事を教えている。現代の社会の中には物を買って、使って、捨てる事が多く、物を作るよろこびや、物を大事にすることも知らない新人類は大きな損をしている。

昔からの技術のよさを理解する事が出来れば、現代の人は自分のルーツを見付ける事が出来る。竹細工はだんだん消えてしまっても、今の若い人の心の中に、竹細工の精神が生き残る事が出来ると思う。

## ○フォーラム「九州とアジア」

「海外、特にアジア地域への私の関心」

木 村 晃 郎（版画家）

1973年、初めて海外（インドネシア）に出た時のこと。

特に東南アジア、中国に強くひかれる理由。

その国々と日本との、私なりの対比。

中国については、ここ8年間における、非常な変化。

そして、これらの国々と日本の将来について。

## ○フォーラム「九州とアジア」

### 「『脱亜入欧』からの脱出」

篠原 治 二（毎日新聞西部本社）

1. 民族に優劣はなく、平たく言えば「氏より育ち」である（梅棹忠夫）。1965年ラオス内戦を取材し、以後のインドシナの変化を見て前説に共鳴する。従って先入観は禁物。日本はアジアの孤児になってはならぬ。九州は交流の接点として重要。
2. 香港の福岡県人会でシンボルソングの選定をめぐってもめた。なぜか。日本人の強い帰属意識。それはタコツボ文化を形成する。
3. 福沢翁の「脱亜入欧」に代わり日本人は「アジアの連帯」を叫ぶ。この表現に対するアジア諸国の反応は冷やか。感情、認識、価値観に違いがある。
4. 昨年、入社試験で面接した学生が、韓国旅行の感想で「板門店はコミック」。私は非礼だと激怒。相手国の立場を理解することが国際交流の基。
5. アジア諸国の現地語を学ぶことが肝要。古代・中世以来の西南圏の対外交渉史を学ぶことで偏見をなくし、新しいアジア諸国とのつきあいを構築したい。

## ○フォーラム「九州とアジア」

### 「九州とその国際化」

陣内 正 敬（九州大学）

1. 「九州とアジア」という時の九州とは何だろうか。地理的、政治的「九州」という概念はあっても、九州で生活している人々の意識の中に「九州」は存在するだろうか。九州の国際化のためには九州内部でのコンセンサスも必要であり、九州とアジアの関係を語ると同時に、あるいはそれを語る前に九州自体を見直すことが大切である。その意見を交換し、認識を深めるのに良いチャンスであろう。
2. また九州（日本）の国際化のためには、人々の意識が国際化する（理解するレベルで良い）必要があり、そこには言語、宗教、国民性の違いなど認識しておかなくてはならない問題が多く存在する。特に伝統的な価値観の強い九州ではその感が強い。

第12回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表

1. 講義担当教官指定参考書 (事前に入手し目を通しておくことが望ましいもの)

| 教官          | 著者名・書名・価格等  |    |                  |         |      |
|-------------|-------------|----|------------------|---------|------|
| 打浪 清一       | 川喜田 二郎      | 著  | 「発想法」            | 中公新書    | 500円 |
|             | 川喜田 二郎      | 著  | 「統発想法」           | 中公新書    | 680円 |
| 鈴木 英治       | 堀 田 満       | 著  | 「日本列島の植物」        | 保育社     | 500円 |
| 北村 賢介       | 小野寺 健       | 編訳 | 「オーウェル評論集」       | 岩波文庫    | 550円 |
| 辻 正二        | き だ み の る   | 著  | 「にっぽん部落」         | 岩波新書    | 430円 |
| 前門 晃        | 貝 塚 爽 平     | 著  | 「日本の地形」          | 岩波新書    | 480円 |
| ロバート・J・アダムス | 井之口 章 次     | 著  | 「民俗学の方法」         | 講談社学術文庫 | 480円 |
| 篠原 治二       | J・V・ネウストプニー | 著  | 「外国人とのコミュニケーション」 | 岩波新書    | 480円 |

2. 推薦参考書 (事前又は事後に図書館等において参照すべきもの)

|      |           |           |         |        |
|------|-----------|-----------|---------|--------|
| 前門 晃 | 目 崎 茂 和 著 | 「琉球孤をさぐる」 | あ き 書 房 | 1,500円 |
|------|-----------|-----------|---------|--------|

### 3. 第12回合宿共同授業を終えて参加講師 による感想

#### 合宿共同授業を終えて

福 留 久 大 (九州大学)

1987年7月11日(土)～7月15日(水)、九重での四泊五日の合宿共同授業が、ともかく無事に終了した。九大では9月9日(水)、参加学生と関係教職員による反省会をもった。オーガナイザーとしては、行事日程を消化できたことで、今ほっと一息ついたところである。

授業の最終時間に学生諸君に書いてもらった感想文、夏休み中に参加教官に寄せていただいた意見書、単位認定のための学生の報告文——それらを熟読しつつ、少しずつ合宿授業の意味を考えたり、次回以降への申し送り事項に思いを巡らしたりしている。

第一回の合宿授業が島原で開かれたとき一講師として参加しただけの経験しかなく、十年余りの間の変化については知るところが少なかった。その間の講師の方々からうかがったところでは、近年は参加学生の間で「合宿」のみが重視され、「授業」には関心が薄い傾向がある、と言うことだった。「夜騒ぎまくって昼は居眠り。何のための合宿授業か」との慨嘆の声も一、二にとどまらなかった。第12回の合宿授業のオーガナイザーを仰せ付かったとき、一番の気懸りは、そのことだった。が、5日間を通してみて、「授業」として、しかも通常の大学の講義とは異なる独自の意味をもった「授業」として立派に成り立っているという印象を受けた。初日私語する学生が多く、「校長」たる立田教養部長から叱責と忠告とが特別に与えられたこともあって、講義中の私語、居眠りも、以後は私の思っていたよりは、少なく目立たなかった。講師の方々が「地域からの視点」というメインテーマに関連づけた多彩な話題を、物心両面にわたる丹念な準備のうえに、それぞれに個性的な手法で展開して下さったおかげだと思う。

「講義に関する討議」の時間があって、学生諸君は、インプットだけに傾斜しがちな通例の大学の講義と異なり、意見の表明、議論への参加というアウトプットの機会があって、よい刺激になったようである。共同授業について「全く不満足だ」と答えた学生も一人だけいた。が、「非常に満足している」39%、「かなり満足している」48%という数字が出たことは、それなりに「成功」と評価してよいのではなかろうか。

オーガナイザーの仕事の一つに、フォーラムの企画・実行があった。このフォーラムの目的は、何かの題目で討論することを通して広く人間存在の多様性、世界システムのあり方など、日頃の生活で思い至ることが余りない事柄について、関心と認識とを深めるきっかけを提供するところにあるだろうと考えた。したがって題目は何であれかまわないわけであるが、種々協議のうえ立田部長の発案に賛成して「九州とアジア」と決った。

そこで、昨年古稀を迎えられた版画家木村晃郎氏、立田部長より一寸年輩の篠原治二氏（毎日新聞取締役）、私が九大に赴任した頃六本松の学生だったという留学生指導教官の陣内正敏氏、九州での生活歴が長く、かつアジアへの関わりの深い方を、「老」（木村さん御海容のほどを！）「壮」「青」という形で組合わせて、基調発題者になっていただいた。

6月1日、福岡市内某所に4人で集まり、2時間ほど議論し、2時間ほど酒杯を傾け、後は当日出たとこ勝負で参りましょうということになった。共同合宿授業に経験の深い学生指導教官の安藤教授の助言もあって、ニュージーランド、台湾、韓国からの留学生に、補足発題者の役をお願いした。

7月12日、当日は、各発題者の体験に裏打ちされた多方面の話題提供のおかげで、学生諸君も関心をかきたてられたようで、フォーラム、3時間半、フォーラムについての討議、1時間半の予定を延長して2時間、あっという間に過ぎることとなった。

学生の感想文を読んでもみると、「白熱の討論に感動した」とか、「これほどネクラな問題にこれほど真面目に取組めるとは、驚きだった」「この様子を世間に知らせて、新人類という呼び方をしないよう訴えたい」とかの表現にうかがえるように、多くの学生にとって得難い経験となったようである。

他面、戦争責任、日本および九州の歴史的特質、欧米の言語アジアの言語、企業の海外進出の影響、大学でのアジア研究の現状批判など、議論が多方面にわたったこと、司会者の私が「交通整理」を苦手としていて、全体の脈絡が参加者につかみ難かったことなどから、「焦点がはっきりしなかった」、「確実なものを得られなかった」、「結局何が言いたいのかよくわからなかった」という感想も散見されることになった。話題の絞り方、広げ方、その均衡をどうするか、今後の検討課題としたい。

十人十色、百人百様。一方に九重登山で人生に自信を抱いた学生がおり、他方に、山登りはこりごり、以後死んでも山には登らないという学生もいる。そういう多様な集団の運営の難しさを痛感した四泊五日だった。経験の乏しい私にとって、立田部長と安藤教授の指導、任務とは言え身を粉にして裏方万般を取りしきる山崎掛長、高治事務官はじめ関係者の援助、それを有難く思い続けた四泊五日でもあった。これは、単なる決り文句ではなく、心底からの実感に基く言葉である。何しろ、種々の企画が盛り込まれていて、それを次々に消化しなくてはならないのであるが、オーガナイザーは初体験者であって、要領が呑み込めないままに、もたもたとうろたえることになる。従来の経緯をよく御存知の方々の御示教を有難く思った所以である。

## 筑紫の万葉歌人たち

### —「車中講義」の試み—

安 藤 延 男（九州大学）

#### 1. は じ め に

第12回合宿共同授業の企画段階で、「車中講義」のことが話に出たが、最終的にはプログラムに含めないこととなった。そもそも「車中講義」とは、開催地である九重研修所までのバスの車中の時間帯にショートレクチュア（といっても余り固苦しいものではない）を取り入れるという趣旨である。しかしこれまでやったことがないこと、バスの中でやれるレクチュアの題材には自ら限りがあることなどの理由で、今回は見送られたわけである。

しかし、私自身、九大キャンパスから九重に向う道程には、車中講義の題材として手頃なものがいくつかあるように思っていたので、今回は余興として、「筑紫の万葉歌人たち」といった内容のバスガイドを試みたい旨、オーガナイザーの福留教授に申し出たところ「ぜひ…」と言って下さったのを良いことに、「一席おつき合いを」ということになった次第である。もとより、文学も歴史も素人の私である。そんな人間の話「レクチュア」などと言っては専門家の方々に叱られるに決っている。標題に「車中講義」と、かっこを付けたのは、そういう思いからにほかならない。

#### 2. 車窓にひろがる万葉

現在の筑紫野、太宰府、大野城等の市町を含めたこの一帯が、古代日本の政治的・文化的な拠点として栄えた地方であることはよく知られている。

主な事項を拾えば、まず663年に白村江で新羅征伐（百済救援）軍が唐の水軍に大敗するや、翌年には対馬・壱岐・筑紫に防人と烽（とぶひ・のろしのこと）が置かれ、さらに大宰府防衛のために水城（みづき）が築かれている。斉明天皇や中大兄皇子、額田王などが、この地に足跡を印した時代である。

やがて壬申の乱（671年）を経て、文武天皇の大宝元（701）年に大宝律令が施行、次いで元明天皇の和銅2（709）年に筑紫観世音寺造営の詔、和銅3年には平城宮への遷都がなされるわけであるが、このころから万葉筑紫歌壇は最盛期を迎える。

たとえば、やがて「筑紫の綿」の歌（巻3：336）の作者となる沙弥満誓が観世音寺造営のため別当として派遣されたのが723年、筑紫歌壇の重鎮の一人山上憶良が筑前守として着任するのが726年、さらに、筑紫歌壇のオーガナイザーともいえるべき大伴旅人が大宰帥に任ぜられてこの地に下向するのが727年という具合。まさに着任ラッシュであり全員集合というわけである。

当時の歌をいくつか見てみよう。

まず、旅人は着任の翌る年（神亀5年）に妻の相伴郎女を喪う。旅人64歳。これに関連した歌が少なくない。

愛（うつく）しき人のまきてし敷たえのわが手まくらをまく人あらめや

（旅人、巻3：438）

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（旅人、巻5：793）

湯の原に鳴くあし鶴（たづ）はわがごとく妹に恋ふれや時わかず鳴く（旅人、巻6：961）

大野山霧立ちわたるわが嘆くおきその風に霧立ちわたる（憶良、巻5：799）

歌中、湯の原とあるのは現二日市温泉〔当時は次田（すぎた）温泉〕一帯のことであり、また大野山は現在の四王寺山である。ところで、これらの歌が詠まれた地点であるが、当時の官人たちの館があったのは現在の坂本部落の辺りといわれているから、大体においてこの坂本部落から大宰府政庁、あるいは観世音寺周辺までの範囲かと思われる。したがって、湯の原に鳴く鶴の声は遠くからかそけく聞こえるという状況であり、また大野山をはい上る霧も、山ふところに至近の地点から仰ぎ見るといふ形であったと思われる。なお、憶良は旅人より5歳年長であり、大野山の霧の歌は旅人の心中を察しての挽歌の一部をなしている。

さて、それから2年後の天平2（730）年正月13日に、旅人の館で「梅花の宴」が催されている。この時に詠まれた歌32首は、万葉集巻5（815～846）に収められているが、その序によると、「帥（そち）の老（おきな）の宅（いへ）に萃るは宴会を申ぶるなり。時に初春の令き月、気淑く風和み、梅は鏡の前の粉を披き……。ここに天を蓋（きぬがさ）にし、地を座（しきみ）にし、膝を促（ちかづ）け、觴（さかづき）を飛ばす。……」などと、当日のパーティの盛況が目につく。ところで、この32首の作者のなかには、大宰府の官人だけでなし、憶良のような地方の役人の名前も見いだされる。たとえば筑後守葛井大夫、豊後守相伴大夫、杵岐守板氏安麻呂、対馬目高氏老、薩摩目高氏海人などと、遠来の客も少なくない。

この32首のうち、やはり旅人と憶良の歌は他にぬきんでており、それぞれに個性がうかがえて面白い。

わが苑（その）に梅の花散るひさかたの天（あめ）より雪の流れ来るかも

（旅人、巻5：822）

春さればまつ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ（憶良、巻5：818）

旅人の歌には、もはや2年前の妻の死による悲愁の影はない。のみならず、65歳とは思われぬ心のハリさえ伝わってくる。これに比べると、憶良の歌は少々自閉的で、この宴席にとけ込めないでいるといった風情すら感じさせる。憶良が、70歳の坂を越えていることも一因をなしているのだろうか。それとも、その年の暮に大納言に任ぜられて都に帰る旅人の異動を予感しての孤独なのか。

ところで、この旅人帰京に際しては、去る人、残る人の間で惜別の情が交換されている。その第一は、憶良の恨みごとまたは陳情である。

天ぎかる鄙（ひな）に五年住いつつ京（みやこ）の風俗（てぶり）忘らえにけり

（巻5：880）

吾が主の御たま賜ひて春さらば奈良の京に召上（めさ）げ給はね（巻5：882）

しかし、何といっても圧巻は、遊女兒島と旅人の水城における別離の歌であろう。

凡（おほ）ならばかもかもせむを恐（かしこ）みと振り痛（た）き袖を忍びてあるかも

（児島、巻6：965）

大和道の吉備の児島を過ぎ行かば筑紫の児島おもほえむかも（旅人、巻6：967）

ますらをと思へる吾や水莖の水城の上に涙のごはむ（旅人、巻6：968）

多少、下衆の勘ぐりのきらいはあるが、先の梅花の宴における旅人の歌の明るさも、あるいはこの娘（おとめ）との交流に源を発していたのかもしれない。

### 3. む す び

大君の遠の朝廷（とおのみかど）と呼ばれた当時の大宰府は、都から下向した人たちにとっては必ずしも快適な生活の場ではなかったようだ。それだけに、官人たちは望郷の思いを秘めて時の移ろいをじっと待つという生活だったのだろう。

大宰少貳小野老は、後に大宰大貳に昇進する人だが、彼もこの頃に望郷の歌を詠んでいる。

あをによし寧楽（なら）の京師（みやこ）は咲く花のにほふがごとく今さかりなり

（巻3：328）

しかし、一方では、住めば都といったこともあったようである。その一例を、観世音寺別当沙弥満誓の「筑紫の綿の歌」にみることができるような気がする。

ところで、万葉集に不滅の名をとどめることになった人たちの周りでひっそりと消光した庶民のことも忘れるわけにはいかない。固有名詞で登場するのは、先の遊女児島であるが、ほかに志賀の白水郎（あま、漁夫）の歌のヒーロー荒雄など、その数は極めて少ない。しかし、筑紫在任中に憶良が詠んだ「貧窮問答の歌」は、古代国家の政治体制の底辺を支えた名もなき人びとの面影をしのばせるのに充分であろう。

（注）次の文献を参照した。

- 1）中西進編『万葉集事典』講談社文庫 1985年
- 2）佐々木信綱編『新訓・万葉集』上・下 岩波文庫 1927年

## 九重合宿に始めて参加して

打 浪 清 一（九州工業大学）

久しぶりに、他の先生の講義を聞いて皆さん夫々個性的でうまいのに驚いたと同時に、一日中座って聞くと案外疲れるということがよく分かりました。

テーマに関しては、全体のテーマを決め、その範囲内で一度各講師から2－3個の候補を出して貰って、全体としてのテーマに統一性があるように選び調整すればよいと感じました。フォーラムの後の討議は、他の講義の討議とは別に行った方がよいと思います。

夜まで公式行事がつまっており、他校の学生と色々と話して親睦を深めようとしてもその時間も無いような忙しさでした。もう少し、考え、討論出来る自由時間を取ったほうが良いと考えます。単位を出す関係上、15駒に相当する講義が必要だとは思いますが、日数を延ばすか、自由討議によるレポート提出に振り替えるかしてとれないもののでしょうか？

最後の夜のコンパの後の2次会に関してですが、運動部のコンパのスタイルなのか一気呑みをした後大声で自己紹介をやっているのですが、がなっているだけで何をいっているのかさっぱり分かりませんでした。自己紹介をやるにしてももう少しスマートに、趣味なども加えてやる方法をマスターした方がよいと思いますが、学生諸君如何ですか？

帰りに寒の地獄という冷泉に寄り、1泊して2時間ほどつかってきました。さすがに13度の水は冷たくて、最初はビリビリとして1分間ももたない感じでしたが、そのうち馴れてきて延べで2時間少々浸って体をフレッシュしてきました。登山による筋肉痛が2－3日後に出るのでは？と心配しておりましたが、冷泉に入ったお陰か、そういうことも起こらず体力に自信を持ちました。

## 講義の討議に関して

### ―「情報と地域社会」の討議など―

メインテーマが「地域からの視点」であったので、私のテーマとしては、「一昨年阪大で行ったバリ島の祭のハイテク機器による調査分析法」、「情報通信技術の発展の地方に対するアセスメント」、「情報通信時代の九州地区のあり方」などを考えたが、対象が教養の学生ということなので、第一案を選んだ。このテーマなら工業の専門知識が無くても理解してもらえそうだし、聞いていて面白いと思うからである。

バリ島のバリヒンズー寺院のオダラン（創立記念祭）の珍しいビデオを紹介しながら説明する予定でいたが、ビデオ再生の準備が出来ないとのことで、残念ながらOHPとスライドとで講義を行った。ビデオなどのAV機器も、是非今後備品として備えて欲しい。

私の専門が情報通信なので、情報処理についての講義が主であると考えていた人もあったようだが、バリ島で行った調査、及びそこで収集したマルチメディアデータの処理、解析の手法について説明したので、情報処理に関しての質問があった。また自然語とは何かというような用語に対しての質問もあり、これらに対しての説明を行った。

ここで試作したのは計算機で行うKJ法システムのようなものであり、これが完成すれば是非使ってみたいと言われる方もおられ、早く完成し皆さんに使って頂けるよう頑張りたい。

またこのように東南アジアの諸国の調査を行うことは、我が国の経済進出の土台を提供することになり、あまり良いこととはいえないのではないかという質問があった。この事柄については時間があれば十分討論したかった事であるが、時間が足りなくなり、更に講義に対する討論とフォーラムの討論とが重なってしまい、十分な討論が出来ずに終わってしまい残念であった。

フォーラムに関しては、登壇したスピーカーの話ばかりで、一般の聴衆との間の討議が出来なかったのは残念である。聴衆に発言を促すと案外発言が出なくて時間を持て余すことが多いが、今回は全く司会者のペースで進行したので、もう少し学生の意見も聞いてみたかった。対話の無いパネル討論は参加者の腹がふくれたまま終わり精神衛生上良くないと思う。

## 合宿共同授業に参加して

鈴木 英 治（鹿児島大学）

鹿児島大学に7年も在任しても、合宿共同授業というものがあることも知らずにいた私でしたが、教務委員の先生に頼まれて、参加することになりました。行く前に4年生などにこの授業について聞いても、知っている人間はほとんどおらず、折角の機会が十分学生に伝わっていない感じがしました。もっとも、人数制限があるので、あまり宣伝すると選択するのが大変になるということがあるのかも知れません。

それはともかく、鹿児島から参加した9名の学生にとっては、他大学の学生と交流を深め、普段は聞けない先生の講義を聞いて、大いに意義のある5日間であったようです。いつも授業するときには「何か質問がありませんか。」と言っても、ほとんど反応がないので講義をしっぱなしのことが大部分でしたが、今回は、討議のための時間がとってあったので、かなり学生の意見や疑問点が聞けて、私にとっても有意義でありました。また、多くの先生に囲まれて講義をするのは、教育実習をやっているようだ、どなたかが言うておりましたが、他の先生の講義の方法を見るのも大変参考になりました。

メインテーマは「地域からの視点」ということで、講師の方々がそれぞれに、なるべくこのテーマにあうような内容を話されたと思います。しかし、残念ながら、芸術・文学・経済・自然科学などと、広い範囲に渡っていたために、お互いの講義の関連づけが難しかったように感じました。これは、講師を各大学からの推薦にまかせる限り、生ずる問題かと思います。オーガナイザーなどが中心になって、もっとテーマを絞って、それにふさわしい講師を指名するような制度は出来ないものかと思いました。

なお、4月に九大で行われた打合わせの会議は、必要であったのだろうか、福岡から鹿児島までの電車のなかで退屈しながら、ぼんやりと考えておりました。

### 「アジアの中での九州の植生の位置」についての討議

誰も来ないのではないかと思っていましたが、16名の学生が参加しました。普段の講義だと3回程度に分けて行う内容を1回ですませたので、若干説明不足の所もあり、まずは、配布した図などの補足説明をおこないました。次に、学生からの質問で、板根は何故できるのかなど講義に即した質問や、講義とは全く関係なく、身近な植物のフェニックスやアロエなどに関する質問などがありました。参加した学生の植物に関する知識はそう多くはありませんでしたので、お互いに白熱した議論を交わす

ということではできませんでしたが、和気あいあいとした雰囲気でした。

なお、このような研究をなんのために行うのかという質問が講義の後にあり、また全体討義の時間に、海外で行う研究は日本の海外侵略の先兵になるのではないかと、といった趣旨の質問がありましたが、十分には答えていなかったのもので、自分の意見を述べておきます。

研究の目的や意義への質問を進めると、その研究は何の役に立つかという点まで行くように感じます。しかし、基礎科学の分野では、何のために役立つかということは、あまり考えないで行われた研究に、重要な発見をしたものが多いように感じます。例えば、現在の生物学の分野で遺伝子工学が、多くの経済的利益が予想されるので、注目を集めています。でも、遺伝学の基礎を作ったメンデルが、19世紀にエンドウの花の色とか豆のシワを研究していた頃に、それが将来何かの役に立つと考えた人はいたでしょうか。日本の科学が応用の分野では優れているが、その基礎となる研究はみんな外国のものであるという批判は、すぐに役に立つ研究を重視する日本の体質にあるように思います。

とは言っても、何の役にも立たない海外研究に、一回で一千万円程度を出してくれるほど日本の政府も甘くはありませんから、それなりに説得力のある理由を持ったテーマを選ぶことになります。例えば、インドネシアには主に、カリマンタンで3年半前に九州と同程度の面積を焼く山火事があり、その後の森林の回復過程を調査するために行ったものです。現在、毎年オランダと同じ程度の面積の熱帯林が、伐採や焼畑などで、減少しつつあります。これはその国だけの問題ではなく、大気中の二酸化炭素の増加による地球の温暖化を起こす原因の一つとなるなど、地球全体の問題となっています。そこで森林を回復させる技術の確立が必要ですが、熱帯ではほとんど、研究が進んでいません。そのためにまず、自然状態でどのように森林が回復していくかを研究するために都合の良い山火事跡で、調査を行った訳です。

ただし、私にとって海外でも国内でも研究を行う個人的な動機は主に珍しい植物をみたり山を歩いたりすることです。そういう単純な事に感動できる心を持っていないと、マラリアや毒ヘビの必配をしながら、オランウータン(森の人の意)と一緒に森林のなかで生活してはいけません。また研究の成果がまとまるのは何年も先のことですから、それまでの研究の過程を楽しめる心が、研究を続けて行くためには必要だと感じます。それは、室内実験をおこなう人にも、実社会で働く人でも同じだと思います。

次にこの様な研究が日本の海外侵略の先兵になるといったような心配に対して、私の考えを述べます。確かに、科学は両刃の剣であり、それを利用する人により、良くも悪くも使える問題があることは否定出来ません。特に植民地時代の海外での研究や宗教活動が、当人の意思とかかわりなく侵略を助けた例が、ヨーロッパだけでなく日本にもあったことは、事実でしょう。また現在でも形をかえて存在しているかもしれません。それを防ぐためには研究者の良心だけに頼ってはいられないので、現在ではほとんどの国で、外国からの研究者に対する多くの規制があります。

たとえば、研究できないテーマや地域もあります。また調査を行うためには、必ずその国の共同研究者が同行しなければなりません。(その同行する人の費用は普通こちらで負担します)。これは、共同研究により研究方法などをその国の人に伝える役割と、外国人を監視する役割とがあるでしょう。また、文部省による通常の海外研究では、調査が終わった翌年、共同研究者を日本に招待して、色々な議論を行ったり、日本でさらに研究をしてもらったりしています。このような、技術・研究方法の伝達の役割や、現地の研究機関などへの経済的援助の役割も、海外調査が担っていることも知ってほしい点です。

また、植物の標本を持出すためには、2セットの標本を作り、1セットはその国に置いて来なければなりません。1つしかない遺跡の発掘物などは、その国の所有となります。

その他、警察の許可など色々あり、調査の前後合せて1ヵ月ぐらいは、そのような許可の取得や規制を守っている事の証明に消えてしまいます。というような状況ですから、世界中から珍しいものを集めて大英博物館を作った時代とは異なることは、知ってほしいと思います。

## 久々に大学の講義を受講して

田 中 廣 滋 (熊本大学)

私は、今回の共同合宿授業に参加して、諸先生の講義を拝聴し、講義に対する学生諸君の対応を横で見ながら思い巡らしたことから、以下の4点を述べてみたいと思います。第1に、私個人として、大学の講義を最近受ける機会がなく、今回の講義では、最初は、講義の時間が長く感じられたりして、大学で学生諸君がどのようにして講義の時間を過しているか。体験を通じてよく理解できた。第2に、私にも講義の機会が与えられたが、講義の内容をどの程度のものにするかということが実は非常に難しい問題であると改めて思い知らされた。具体的には、入門的な内容で講義を構成すれば、学生は、中・高校の延長だと反発するし、かといって、自分の研究テーマを詳しく解説すれば、聞く方も興味を覚え、その講義は印象深いものとなるが、その教科の他の基本的な知識のない学生にとって、一方的な見解の押しつけという問題が浮び上ってきて、第2の問題への回答は、なかなか容易には得られそうにもない。第3は、教養課程での学生が多数で多様な要求を持つことから、かれらまたはかの女らへの対応が難しいということである。この理由のため、教官は、自分の信念や結論を一方的に学生に押しつける傾向があり、これに積極的に反論しない学生の姿勢に問題はあるが、それだけでは片付けられないことがあるような気がする。学生は、自分の将来に関係する問題を現実的な感覚で鋭くとらえようとしており、世代のギャップといえどもそれまでだが、この学生の感覚的な接近と教官の長年

の経験に基づいた信念が本当の意味で衝突する場面がもっとあることを今回の合宿で期待したが、両者の間の隔たりは簡単には埋められないという結果に終わったようであった。第4に、スケジュールに関して、次の配慮も望まれた。せっかく大学をはなれて、自然が豊かな環境におかれているのであるから、2単位という制約はあるとしても、自由時間がもっとある余裕のある合宿授業ができれば、もっとその効果が上がると思われる。

いずれにしても、今回の共同授業は、学生諸君との対応を含めた広い意味での教養教育に関するいくつかの重要な問題点を、私により具体的に示してくれた。この意味で、私にとって有意義な体験であったし、今回の企画は教養教育を担当する教官にとって一度は体験すべき「研修」としての意義もあるといえるであろう。

## 「地域と産業」の討議内容の報告

同じ討議の時間帯に、フォーラムに関する討議が開かれ、多くの学生がそこに参加したこともあって、「地域と産業」に関する討議に参加した学生・教職員の数は少なかった。しかし、その数が少ないことが幸いして、参加者全員に十分な発言の機会が与えられ、討議の会場は有意義な意見交換の場となった。

討議の内容は次の2点に要約される。第1に、貿易摩擦「金あまり現象（地価・株価高騰）」などの現代の経済問題が、地域との関連でどのように総合的に把握されるか。第2に、経済学は、軍事（日本企業のSDIへの参加など）環境（IC産業による水質汚濁など）問題に代表される政治・社会問題にどのように対応するのか。予定より一時間以上延長して討議は実施されたが、それ以後は、会場の確保ができず、まだ議論を続けたいという一部学生の要望に応えられなかったことが残念であった。

## 討議についての感想・政治主義の限界

北 村 賢 介（九州芸術工科大学）

オーウェルもミラーも、政治主義の限界を知り抜いてみた作家であり、およそかけ離れた作風を持つ二人も、その点で共通してゐる。

政治主義者は、或る特定の信条を奉じて、その信条で人間を割り切る。が、人間が人間である所以は、如何なる信条をもつてしても割り切れぬ所にあり、此処に道德の問題が顕はれるのだが、私の講義の狙ひの一つは、この政治主義の浅薄と道德の大事を理解して貫ふ所にあつた。が、少々難かしか

つたやうである。「人間は社会的諸関係の総和であるから、社会的環境を変革せぬ限り総ては無意味ではないか、社会主義共産主義の必要を考へよ」といふ或る学生の意見を聞いて、正直な話、がっかりした。これこそ政治主義的発想に他ならぬではないか。私は、環境がどう変はらうと解決出来ぬ人間の問題を考へる事こそ大切である、則ち道德の問題の大事について語つたのだ。社会主義で総てが解決するのなら、ソ連や中国に悪人はゐない筈だ。

学生のその他の質問で印象に残つてゐるのは、西洋でいふ正邪善惡と、日本でいふ正邪善惡とはどう違ふか、といふ質問である。これは大問題であり、およその私の考えを答へたが、もつと深く考へてみたい人に、考へるヒントとして「西欧の正義 日本の正義」（日本文化会議編 三修社）の一読を薦める。

### 合宿生活について・饗宴

私は、芸工大で、教養課程の英語を教へてをり、普段専門の英文学について話す機会が無いので、今回の英文学の講義担当は大層楽しかった。学生諸君も概ね熱心に聴講してくれたやうである。講義以外に楽しかった事は、相部屋の諸先生方と、それぞれの専門分野の知識を酒の肴にしながら、毎夜おそく迄、酒を飲みつつ語り合つた事である。これをプラトンに倣ひ「饗宴」（シンポジウム）といへば、勿論大げさに過ぎよう、が、私にはそれ程面白かつ有益だつたのだ。

ところで、私達の部屋の隣は学生諸君の大部屋となつており、彼等も私達に負けず、夜毎酒宴を開いてゐた。が、こちらの方は、純然たる宴会それも甚だ騒々しい宴会である。滅多な事では聞く事の出来ぬ奇声、蛩声、嬌声を張り上げながら、只管焼酎のガブ飲みをする。知性の片鱗すらうかがへぬ。日程表には、「自由討議」の時間と書いてある。二日目の夜、私は到頭たまりかね、三度に渡り、隣室に怒鳴りこんだ。が、彼等の知性は、その夜も次の夜もその次の夜も、竟に覚醒する事はなかつたのである。

いささか不謹慎のそしりはあらうが、酒の肴には学問が一番良いのである。それぞれ専門分野の違ふ九州各地の学生が、酒を酌み交はしながら、文学論思想論芸術論学問論を戦はす、これこそ真の「自由討議」であらう。合宿する事の意義の一つも、さういふ所にあつた筈だ。——「よき人々の宴席にはすすんでよき人々が出かけて行く」（「饗宴」プラトン）——

以上、学生諸君に苦言を少々、併せて猛省を促す。

## 合宿共同授業に参加して

辻 正 二 (宮崎大学)

今回こうした九州地区国立大学間合宿共同授業に教員として参加したのであるが、正直いって4泊5日の授業はいい勉強になったように思う。

まず、合宿授業という形態が一種の総合科目ないし集中講義の性格をもっており、しかも、普段自分の大学で講義する場合と比べると、講義、パネル・ディスカッション、特別講義と多様な授業形態が組み込まれていたのも、学生諸君のみならず、教える側の教師である私にとっても他の先生がたの講義を聞くことができたので、久しぶりに学生時代のような緊張と刺激をうるよい機会であったと思っている。ただ、講義そのものについていえば、(各大学の事情もあるであろうが) テーマである「地域からの視点」について、考察対象をもう少し限定したり(アジア、日本、九州といった) できればテーマに即した人選がなされておれば、よりよかったように思う。

それから、講義をした教師の立場でいえば、今後の施設改善の要望ということになるが、学生及び教師にとっての予習のできる場が欲しいと思った。図書室までは望まないとしても静かに学習できる部屋が一部屋でもあれば講義当日の予習もできたように思われる。

ついで、合宿生活についてであるが、宿泊施設2箇所の利用は、参加者の関係上しかたなかったのかもしれないが、もう少し宿泊に関して平等に出来なかったであろうか。「九大の家」に泊まった人たちが5日間、一日4～5回以上の往復を余儀なくされたのは、最初の割当計画と割り切っても、何か腑に落ちないものを感じた。せいぜいシーツが変わるぐらいであるとすれば途中で入れ換えることもできたわけで、今後一考を要するように思われた。

それと、登山のことであるが、途中にであった小中高生たちの登山の引率の教師の方が少なかったように思う。大人の登山であるし、ひたすら登るといふ登山もよいが、久住のような山では、レクリエーションとして野外の散策(植生の観察、九電地熱発電所見学など)といった趣向も今後考慮してよいように思う。

## 講義について

「地域と高齢化」というテーマで、九州、特に宮崎の高齢化の進行状況とそうした地域の問題点を述べたつもりである。19歳前後の学生には関心がないと思っていたが、討議の参加者は予想以上に多かった。新人類といわれるいまの若い年代の学生諸君が「ネクラ」を嫌う風潮の世代と思っていただけに、予想を越えた討議参加者には、驚いた。

討論は参加した学生諸君に感じたこと、参加した理由を述べてもらうかたちをとった。従って、一言も述べる事が出来なかったと思ったものはいなかったと思う。が、時間の制約から討議の柱をもち、議論するところまではいかなかった。ただ、ほとんどの学生諸君が自分の親や近親者の老いの問題として高齢者問題を理解している点は印象深かった。一人一人が真摯な態度で高齢者問題を考え、答弁している姿をみていると高齢化社会に希望をみいだした感じがして、気を強くしたしだいである。

## 合宿授業に対する意見

前 門 晃（琉球大学）

いつの時代でも学生と酒とは切っても切れないものであり、酒を飲んでワイワイ盛り上がるのは現在も過去もあまり変わらないように思えるが、議論が少ないように感じたのは私一人であろうか、いや、むしろ議論するのを避けているような感じさえした、議論が酒の最高のつまみだと思っているが、いかがなものだろうか、九重では酒を飲むか、勉強するか、寝るしかなく、それらのことが徹底してできる場所である。一つを徹底してすれば他方がおろそかになりがちだが、5日間という短い期間なので酒も勉強もとよくばっていいのではないだろうか。学生達はそれができるエネルギーをもっているのだから。

学生・教官が同じ場所で寝起きし、5日間にわたって同じ土俵上で生活すると、お互いが多少みえてくるものであり、人生勉強では大いに参考になった合宿であった。合宿授業では何か一つ得るものがあればいいのではないだろうか。

## 講義に対する討議

身近な自然に関心があるのか多くの学生が討議に参加し、質疑応答で討議を行った。講義では時間配分に失敗し、いくつかの地形と、詳しい話しができなかった。そのせいか、討議では“九州の火山と本州の火山はどうちがう、なぜちがうのか、”タイプのちがうサンゴ礁はどのようにしてできるのか、”鐘乳洞は、などの質問が出された。また、現在十分に解明されていない現象に対する質問もあり、今後の地形学・地質学の発展にまたなければならない問題もあった。今まで教科書で読んだり、実際に自分の目で見たりした現象に対する質問が大部分で、身近な自然に対して関心があることを感じさせた。

自分達の集近な自然に対して少しでも関心をもつようになれば本講義は成功だと考える。

## 合宿共同授業報告書

ロバート・J・アダムス（宮崎医科大学）

今年、事情があって、授業と討議に出席することが出来なかったのも、普通のように感想文を書けないことになりました。

今年の感想文を遠慮させていただきたいと存じます。ただ、いろいろの面から、自分の特別講義に対して、よき反応があったらいい、ととてもありがたいと思って居ります。

## 合宿共同授業雑感

木 村 晃 郎（版画家）

アジアと日本につき、私自身のささやかな体験を通して、若干話をし、又討論にも参加したが、学生の方から、今一つ考えさせられるような議論に出会わなかった。結局学生諸君の関心を、こちらに結びつける力が、無かったからであろう。

大体教養とは、たとえば文学作品や絵画などを、読んだり見たりして、面白いとか、美しいとかいって、喜こんでいるようなものとは、ちがうと思うのだが。

とにかく知識も感覚も、ただ人々の上にまとった衣服にすぎないのでは、どうにもならない。ただ今の学生には、それを自己の内部にまで取り込むには、あまりに精神的に子供にすぎるといのが、本当ではなかろうか。

そこで悪くすると、子供に本物のピストルを持たすようなことに、なりはしないか。無論今の学生は素直だから、数多のピストルを持った子供が社会に出て、彼等を使う企業や行政が、まともであれば、それほど心配はいらぬと思うが、昨今の日本の現状を見ると、大人自身がふらふらしており、とても楽観できる状態では、なさそうである。

まあかような大きな問題は、とても簡単に結論づけるものでもないが、とにかく今の大学教育において、あえて一言いわせてもらうなら、何をおいてもやるべきは、この近代社会の屈曲した流れの中で、21世紀社会への、ある程度の明確な指針を与えることではなかろうか。若者がそれをつかんでくれば、多少の言動の幼稚さはあっても、正しい方向に進んでいく努力をすると思う。

かつて日本の教育は、半世紀前に、それが無かった、いやまちがった指針を与えたが故に、現在か

ら見る時、バカなようなことで、多くの若者が犠牲になり、又ムダな青春をすごしたことを考えれば、そのことがよくわかると思う。(1987. 8. 7記)

## 登山指導を担当して

前 田 寛 (大分大学)

久住山登山が、授業に含まれるのか、レクリエーションに位置づけられるのかはっきりしないまま、僅かに北上した梅雨前線と、南から接近しつつある台風5号の間隙をぬって、曇り空の中、なんとか決行することになった。

団体の山行は、前の人に続くだけで、運動不足の解消に終りがちである。そこで地図読みの練習と、少しはゆったりと周囲の景色や植物を見ながらマイペースで登山を楽しめるようにと、オリエンテーリングの1種である、ラインOLを行ない、ゲーム的要素を取り入れてみた。そうすることにより、登山者は、地図読みが正確にできていればの話だが、自分の現在地を確認しながら登ることができるし、適度な休憩にもなると思われる。帰ってから地図を回収してみると、道の分枝点などの目標がはっきりしているポストは正確にマークができたが、目標のみにつけにくいポストは500mぐらいずれているものが多かった。

登山中の天気は、途中霧がかかったが、道がわからなくなる程は濃くならず、頂上では、いくつかの班は、一瞬の霧の切れ目から下界を見おろすことができた。また下山しはじめてしばらくしてから、大粒の雨が降り始め、あわててカップを羽織るものもいたがすぐにやんだ。麓に近くなって、雷がなり初めたが雨にはならず全員無事に、漏れることなく宿舎に到着した。その後、風呂の中からみる夕立は格別いい雨であった。

私としては実力も天気の状態も、苦し紛れの登山ではあったが、これを機会に、参加者が少しでも山に興味をもち、山に登れるようになってくれたらいいと思う。最後に、73才の高齢ながら完歩された臼井さんに敬意を表するとともに、初めから終わりまで臼井さんを見守られた田中先生、また山の経験者の中溝先生や鈴木先生、しんがりをしっかり確保して下さった高治さんや福田さん、また下見に同行して下さった方々に深く感謝します。

## 第12回合宿共同授業に参加して

中 溝 幸 夫（福岡教育大学）

この企画には2つの主要なねらいがあると思う。1つは、大学間の人的交流で、もう1つは、個別大学の枠を越えた‘面白い’授業による知的刺激効果である。どちらも個別大学の枠内では難しいことなので、企画を実施すること自体、そもそも意味があることだと思う。学生も教官も参加するだけで日常性を越えた新しい体験を手にすることができる（とくに初めての参加であればなおさら）。私自身、今回が初めてであった。なるほど、他大学の、他の専門分野の教官と寝食を共にしながら5日間の合宿研修は、人的交流、専門外の学問との接触、自分の授業方法の点検という点で、個人的に大いに得るところがあった。

しかし、個人レベルを越えたところで考えてみるならば、「単位認定」という制度的な枠が計画内容にひじょうに大きな制約を与えているような気がする。もし、思い切って単位認定をやめてしまい（そんなことをすれば参加学生は激減して、学生を集めるのにひどく苦勞する……とは私は思わない。わが大学は別の理由からまだ単位認定をしていないが、企画の面白さ、非日常性を少し強調して宣伝したら、簡単に定員以上の参加者が集まった。要は企画内容の面白さと宣伝の仕方次第だと思う。）、純粋に2つのねらいの達成を追求するならば、授業テーマの選択をはじめ、企画内容への学生参加（コンパの出し物だけではなく、知的企てについても新猿人……ではない新人類の発想を期待して）や、計画消化の時間的厳密さをもう少しゆるやかにした形で実施できるかもしれない。

## 大学間交流の拡大を

豊 島 耕 一（佐賀大学）

私自身九州の人間として、合宿の行われる九重・筋湯には子供のころから何回となく訪れていて、なつかしい山間いである。そのすがすがしい高原の中とはいえ、5日間もカン詰めになるのかと思うと少し気が重かったのだが、終わって振り返ってみれば楽しく、また刺激的な経験であった。ほかの大学の同僚が見ているなかで行われる講義、学生が先生の講義に文句をつける「講義についての討議」というセッション、それにフォーラムと、初めて参加した私にとってはいずれも新鮮な印象を与えるものであった。（考えてみれば、私が学生の頃にはこのようなサービスは受けられなかったわけであ

る。)また、学生が宿舍で他大生と交流を深めたように、私も他大学の先生方と知り合いになることができた。学生にとっても得るところが多かっただろうと想像される。

しかしこの経験を共有できるのは学生の中でもほんの一部にすぎない。佐大では1年生のわずか2%である。これは貴重な大学間交流で得たものを大学の日常の中にフィードバックするには余りにも少ない数である。かと言って合宿の規模の拡大が困難だとすれば、大学間交流のもう一つの柱である大学相互の単位互換制に目を向ける必要があろう。この制度が、合宿共同授業が行なわれたこの12年間にほとんど具体化していないのは残念なことである。学則上はどの国立大学でも認めているはずだから、残るのは条件整備のみである。遠距離ならばともかく、たとえば佐賀ー福岡ぐらいの距離であれば、週のうち1日はほかの大学で授業を受けるというのもそう無理なことではない。しかしそのためには例えば、1日のうちに少なくとも2科目はそこで受講できるというような条件づくりが必要だろう。あるいは、短期間の“出張”で単位が取れるような2単位の集中講義という方法もあろう。九州各地の教務担当者が集まる数少ない機会であるこの合宿のための企画委員会などの際にひとつ話題にしてはいかがだろうか。この面での大学交流が進めば、それはまた新たな反作用を合宿共同授業自体に対しても与えることになるにちがいない。

## 来年度のために

猪 飼 隆 明 (熊本大学)

確か1977年であったか、この共同合宿授業に講師のひとりとして参加したことがあった。その時僕は天皇制について講義したが、長大の先生のトノサマガエルのはなし、九大の安東先生の大気汚染のはなし、芸工大三上先生の三全総批判、琉大の先生の民族学のはなし……など、専門外の講義は実に新鮮で、参加した先生方と酌みかわす酒もおいしかった記憶がいまも残っている。懇親会のとき、芸工大から参加した3～4人の学生が、いきなり柱やロッカーにしがみついて、ミーン・ミーン、ツクツクホーシなどとないてみせたのには驚きもし感心もした。また琉大の諸君の指導で踊ったことも、楽しい思い出である。

今回久しぶりに参加した。参加したとは言っても、2日目(7月12日)の熊大田中教官の講義に漸く間に合って到着し、翌3日目の芸工大北村教官の講義を終えて引き上げた。中途半端な参加で失礼ではあったが、来年度の合宿共同授業の企画にかかわらねばならなくなり、ともかくフォーラムだけは、どんな形で、内容で行なわれているのかを、知りたいと思ったからであった。

フォーラムのテーマ「九州とアジア」は魅力的なテーマであり、東南アジア・中国を駆け巡りなが

ら芸術活動をされている木村晃郎氏、ジャーナリスト篠原治二氏、留学生担当教官陳内正敏氏の三氏を講師に、ニュージーランド、台湾、朝鮮からの留学生を受講生に配するという、配慮の行き届いた企画であり、活発な討論が行なわれたが、全体的な討論の基調は、アジア諸国、諸民族にかかわる僕たち日本人の“心がまえ”といった、いわば主体性論のレベルにあったためか、何かしつかりしたものを獲得して終るということでは、少々もの足りなさを感じないわけにはいかなかった。「九州とアジア」というとき、やはり、それにかかわるこれまでの歴史的遺産について、歴史具体的な講義がほしかったと思う。

しかし、来年度どんなことができるだろうかと考えると、とても気が重くなるし、担当者の気苦労がしのばれる。

## 九重に思う

陣 内 正 敬 (九州大学)

昨年の沖縄合宿に続いての登板であった。あの真夏の強烈な太陽の下で、学生諸君はもちろん我々教官も少々バテ気味であったが、なんとか一週間乗り切ったことがなつかしく思い出される。はるばる渡嘉敷島まで渡った後の解放感、旅をしたという実感を伴うものであった。学生諸君は長旅の疲れにもめげず最初の夜から騒いでいたが、あれは真青な南の島の海を祝福してのことだったのかも知れない。

さて今回の九重合宿、私自身もう何回も行ったところだが、大学院生の時以来ということで数年来の友人に会うという心境であった。そして最初の夜。何と学生諸君はおとなしく眠りについたようである。海と山とではこんなにも違うものかと驚いてしまった。深夜まで語らい続けていたのは我々教職員の方であった。もっとも二日目の夜からは昨年と同様であったが。

さて久しぶりに九重研修所を訪れて感じたことがあった。なつかしい思い出のある旧友に久方ぶりに会うのはとても楽しいことではあったが、その思い出が今回の再会でどうも薄められ中和され、少々淋しい感じを味わった。相手はちっとも変わっていないのに、こちらが以前の学生としての僕ではなく、教官というあまりおもしろくない役柄を演じているために、せつかくの九重が「苦渋」になったのであろう。九重研修所を味わうなら学生の時だけがいいと思う。

## 4. 学生による発表と感想

### (1) 留学生のフォーラムでの発表

セイディ・パーチャー（九州大学 文学部）

フォーラムの時に私が口頭発表したことをここに述べておく。

それは私が日本に来てから日本と日本人についての印象のことである。印象と言ったら、このばあいに私の国ニュージーランドと日本とちがうことがほとんどである。日本とニュージーランドはぜんぜんちがうけれども、私が一番強く「ちがう」と感じたことを書いておく。

最初は日本についての印象を書く。実は奨学金をもらう前に日本に来たことがあって、その時のことである。一昨年の夏に長野県でアルバイトをやっていた。ほとんどその所だけにいたけれども三日間ぐらいの旅行もした。長野県にいた時も旅行していたときもずっといなかをさがしていた。そこを書くとおかしいと思うかもしれないけれど私がさがしていたのはニュージーランドのいなかみたいな人間の住んでいる様子のない所、又は牧場のある所だった。でも私が旅行した所にどうもないらしい。日本では長野県あたりはいなかだと思われているらしいけれど、県内にどこへ行っても人間がいることがわすれられない。どこへ行ってもペンション、車、自動販売機などがある。畑があっても、いつもお米ややさいを栽培していて、動物が一匹も見えない。これはほんとうに変な感じがした。ニュージーランドは農業の国で、もちろんやさいや穀物を栽培しているけれども、農業収入はほとんど羊や牛からである。だから日本に来て、いなかへ行っても動物のいない畑ばかり見ると何かが足りない感じがする。そして、日本国内、どこへ行っても人が見られることも私にはたいへん変な感じがする。だけれども、どこでも人が見られるのはあたりまえだ。ニュージーランドの大きさは日本の三分の二なのに全国人口は大阪と同じぐらいだ。日本に来る前にそのことを知っていたのに、実際に経験しないと想像できないことだ。ニュージーランドである所へ行ったらぜんぜん人がいないので、同じ地球に人間がいることが忘れられるけど、日本ではそういう所をまだ見つけていない。

人がおおぜいいることは悪いことという意味ではない。私にとってはたいへんおもしろい。ニュージーランドとその点でぎゃくだからである。私が感じたことと同じように、もし日本人又は人のおおぜい住んでいる国の人がニュージーランドへ行ったら、人がいないことを不思議に感じると思う。

言いたいことは次のことである。日本には私がいなからしいと思っているいなかをまだ見つけていないのに、かわりに新しく、日本らしいいなかをみつけた。つまり、自分の生まれ育った国からぜんぜんちがう国へ行けば行くほど新しいことを習うだけでなく、自分の考え方も広げることができ

るということだ。

今まで書いたのは日本という国についての印象だった。これから書きたいと思うのは日本人についての印象だ。

これから書くことは日本人に対してあまりいいことではないかもしれないけれども、日本に来てから一番強く気づいたことである。

私がどこへ行っても、何をしても目立っていて、最初日本に来たときにほんとうにいやだった。今は慣れて来たけれども、まだ分からないことはどうして日本人が白人か黒人の人を見るとかならずゆびさして、「外人だ」と言うことだ。東京や京都みたいに外人がおおぜいいる所ではぜんぜん問題はないが、その所から少しでも離れた所に行ったら、すぐ言われてしまう。

金髪がある白人は黒い髪がある東洋人の中にいると目立つのはあたりまえだが、やっぱり台湾や韓国から来ている学生のことがうらやましい。

日本でよく聞くことばは「国際的」、「国際」などであるが、日本はほんとうに国際的な国なのだろうか。もし、まだ外人がめずらしいものだと思っているのなら、まだ国際的ではないと思う。だけれども、国が国際的になれるためにその国に住んでいる人たちは個人的にほかの国から来た人に対して広い考え方がないと、その国全体は国際的にならないと思う。だから、もしほかの国の人に来て、話していて、ずっと「この人は外人だ」と思いつづけたら、もうだめだと思う。けれども、もしその人が「外人」ではなくて、ただ「人」だけだと思ったら、それは国際的な考え方だと私は思う。だからもし国を国際的にしたかったら、その国に住んでいる人は個人的に、一人づつがんばらなければならない。したがって、ほかの国が自分の母国と違うと頭の中で知っていても、実際にその国へ行ってみなければ、その違うことが理解できない。又、ほかの国に住めば住むほど自分の母国の良い点も悪い点もわかるようになってくると言える。

黄 益 鉉（九州大学 経済学部）

19世紀の明治維新以来、「和魂洋才」と言いながら西洋に追いつくため、アジアにとどまっていけないと、「脱亜入欧」と、いいだして、西洋に夢中だった日本。

ところが、時代は変って、今日の日本は先進諸国の中でも指おりの経済大国となった。

それに従って、国際社会でも、日本の活躍が大きく期待されている。その中でも、特に経済面には、貿易問題で、アメリカや、ヨーロッパや、世界のいろいろな国々などから、その解決のため、日本ができるだけのことをするように要求され、また、これと共に、日本と日本人は急速な国際化を要求されている。

狭い窓を通して、外界と接触していた時代は終り、これまでのとおりではとうていやって行けない時代が来たのを感じている。

それで、これからは、より広く自分の窓を開放し、その獲得し蓄積して来た文化なり、技術的ノウハウなり、経済的なことを他の世界と分ちもたなければならないときがきている。これにたいして、日本もこの波に応じて変えて行かなければならないのであろう。

こういう状況の中で、日本はいままで、軽視したアジアとの関係に重点をおきはじめたのである。

しかし、日本とアジア諸国とのあいだには日本人にして見れば、不幸な歴史があったとしか言うことができないかも知れないが、相手の人々にとっては、そう簡単にはいかないことであろう。なぜならば、彼らにとってはそのおかげがいまだに、国のいたるところ生活のいたるところまで、まだまだ、根づよく残っているからである。また、日本は、アジアとの連帯をさげびながら、アジアとの交流を深めようと、経済援助なり、文化交流などいろいろな分野で力を入れているが、これに対するアジア諸国の反応は冷やかである。

もちろん、国家の政策や、企業の拡張のため、いろいろな問題のからんだ経済援助などのしかたの結果、でてくる逆効果にも問題はあろう。しかし、根本的なのは、アジアに対する日本の投資や、企業進出や援助したお金がどのくらいだったのかという統計資料の数字だけのことではないのである。

とすると、どうすればいいのか。まず、アジアを日本人に理解させ、文化レベルで結びつけるような仕事に手をつけることが先ではないのかと思う。たとえば、日本の大学でどれだけの大学がアジアに関する講座を持ち、言語を教えているだろうか。また、アジアの文化に対して、日本人はどれだけの知識を持ち、関心を持っているといえるのだろうか。もちろん、ないわけではない。しかし、その多くは週刊誌や安手の雑誌を通じての“おあそび”記事だ。多くのツーリストはこれを読んで興味本位で出かけて、文化交流とはほど遠い次元での接触である。このようにつづくと、文化交流とは言えないことであろう。

これからの日本人のなすべきこと、それはまず、人間本来の姿に立ち戻ることであろう。心の貧しい日本人ではなく、人類共通の文化に目をむけ、自己の利益よりも現地の文化や経済の発展のためにみずからを犠牲にするような、心豊かな人間に立ち戻らねばならないのであろう。さらに政府としても、単に経済的な交流だけではなく、文化と文化との結びつきのために、なおいっそうの努力をはかるべきだと思う。事実、文化的な交流の上に立つてこそ、経済的な連帯もより高い理解の上に発展し、実り多いものとなるのである。

“エコノミックアニマル”とか“イエローヤンキー”といった非難は、日本政府あるいはアジアで働く個々の日本人、そして終局的には日本人全体の、心の貧しさ、文化的教養の低さに由来することだと思われる。

もし今日のままで過すならば、日本人はいつまでたっても、経済的にのみ活動する機械人間として、

アジアの人々から嫌われつづけられると思われる。経済協力と簡単にいうが、経済協力が結局は人間と人間との接触であるかぎり、経済という局面だけに問題を限定することは大きなあやまりである。経済協力と同等の、あるいはむしろそれ以上の比率で、文化協力が行われねばなるまい。

だから、日本、あるいは日本人が異国や異文化を持つ人々との接触で、このようなことをしっかりとわかって、アジア、または他世界との交流で、人間本来の姿で、お互いの立場に立って相手を理解しようと努力すべきだと思うのである。

## 莊 文 哲（九州大学 医学部）

21世紀は国際文化の時代だと言われている。国際化を進めるうえで、九州は地理的にも近く、歴史的にも深いつながりを持った中国、韓国をはじめとするアジア諸国との関係強化は大きな課題だ。また急速な円高はいやおうなしに九州の国際化を促すことになる。この数年「九州の国際化」が叫ばれ、一種の流行語になったが「九州の国際化」とは一体、九州がどんな状態になることを指すのだろうか。この点についての説明も理解もあまりない。

日本人が言う国際化の意味は、もっと具体的に説明しないと外国人に通用しないニュアンスがある。国際化には行政や民間サイドによるハード面、あるいはハードからみの企画や施設の必要なことは言うまでもないが、それと並んで、いなそれに先行して市民1人1人の意識のなかに国際感覚を植えられることが先決である。1人でも多くの国際人を九州に育てることである。「九州の国際人」とは、九州の大地に両足をしっかりと踏みしめた上で、九州の歴史、文化、経済、社会、そして生活の実態を外国人に説明し、理解させ、九州に関心を待たけることのできる人である。同時に、寛容の気持ちで、相手の言語、風習、ライフスタイルを受け入れてあげることも大切である。いたずらに「外国かぶれ」になることが国際化ではない。次に異文化間コミュニケーション・ギャップ、あるいはパーセプション・ギャップの問題にうまく対処する術、つまり自分の意思や立場を相手にうまく納得させる能力を身に着けることが必要である。日本人、特に九州人はどうもこの点が弱い。これは語学力以前の問題である。もう一つ大事なことがある。日本人は白人社会に対して劣等コンプレックス、有色人種に対しては優越コンプレックスを持つ傾向がある。いずれも根は同じで、相手によって優越感になったり劣等感になったりする。九州国際化のためには、どちらのコンプレックスもなくすよう努めたい。自分の周辺にいる外国人の存在を意識する度合いが少なければ少ないほど、その社会は国際的とも言える。この点、九州の場合まだ不十分と言わざるを得ない。一番大事なことは、いろいろな外国の人たちと直接会って心の交流を図ることだ。そうすれば、相違点よりは類似点を見いだすことの方が多いはずだ。

国際化の中でいま日本がおかれているのは、江戸時代の文明開化みたいなもの、当時の日本は世界の中で政治的、経済的にその前に長い鎖国時代があるので、存在は小さかったが、戦後、飛躍的な経済発展を遂げ自由世界では第二位になった。ひところはアメリカがクシャミをすれば日本は風邪をひくと言われていたが、最近ではほぼ対等になったと思う。それだけ世界の中における日本の存在が大きくなって来た。非常に国際社会の中で日本の一挙手一投足が良い意味においても悪い意味においても注目の的になって来た。そういうことで一層国際化を進めなければならない。国際人を作らなければならない。そういうようなことが言われて来て、とにかく今はもういろいろな所で国際化が言われている。日本は島国で1億単位で動く。たとえばアメリカでいうといろいろな人種の人がいるが、その人達がお互いに競争して国と言うのがあるわけだが、日本の場合は「単一民族」であり、1億単位で動くわけだ。国際化するためには国際人を造る必要があるわけだが、パスポートを持って外国に行くことではない。団体で行って一緒に行動しても日本と風景が違うだけで日本の国内旅行とかかわらないと思う。一番大切な事はその国で何人の人とコミュニケーションを持ったかが重要である。コミュニケーションと言うかふれあいのない所に国際人と言うことはないと思う。外国へ行くのが国際人ではなくどうして、いかにして外国の人と膝を交えて付き合うかが一番大切ではないだろうか。人の付き合いから国際人が始まると思う。国際化と地域に生きると言うのはある意味においては矛盾している概念ではないかと思う。例えば外国へ行かなければ外国の事は分らないと思う。私が日本へ来て日本について何百冊の本を読むより、来てみて分った部分がたくさんあると思う。田舎に住んでいる人間が、日本・世界の流れの中でどんな位置を占めているかなかなか分らないと思う。そこで一生懸命生きている人間はその問題で精一杯だから自分達の生きているその場所が日本全体、世界の中でどんな位置を占めているかなかなか分らないと思う。だから、外国へ行行って、外国人との付き合い、自分の文化を基準にして、いいとか悪いとか判断するのではなく、相手の文化と自分の文化との違いを認め、互いに相手の文化から学び合う努力が必要だと思う。

## (2) 合宿共同授業に対する参加学生のアンケート（最終日実施）

回答率 93% (84/90)

| 1. この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。         | 回 答 数 | 回 答 率 |
|----------------------------------------|-------|-------|
| (1) 自分から進んで参加した。                       | 66    | 78.5  |
| (2) 友人（たち）にすすめられて参加した。                 | 10    | 11.9  |
| (3) 大学（教官・事務）にすすめられて参加した。              | 4     | 4.8   |
| (4) そ の 他                              | 4     | 4.8   |
| 2. この共同授業にどの程度期待していましたか。               |       |       |
| (1) 非常に期待していた。                         | 15    | 17.9  |
| (2) かなり期待していた。                         | 24    | 28.6  |
| (3) ある程度期待していた。                        | 32    | 38.1  |
| (4) あまり期待していなかった。                      | 13    | 15.4  |
| 3. この共同授業を終わろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。 |       |       |
| (1) 非常に満足している。                         | 33    | 39.3  |
| (2) かなり満足している。                         | 40    | 47.6  |
| (3) やや不満である。                           | 10    | 11.9  |
| (4) 全く不満だ。                             | 1     | 1.2   |
| 4. この共同授業の開催に適当な時期について意見を述べてください。      |       |       |
| (1) 10月初め                              | 4     | 4.8   |
| (2) 夏季休業に入る 7 月10日過ぎ                   | 70    | 83.3  |
| (3) 10月中旬                              | 4     | 4.8   |
| (4) 12月下旬                              | 0     | 0     |
| (5) そ の 他                              | 6     | 7.1   |

5. 日程期間は今回は5日間でしたが一般に何日くらいが適当と思いますか。

|           |    |      |
|-----------|----|------|
| (1) 3日間程度 | 5  | 6    |
| (2) 4日間程度 | 10 | 11.9 |
| (3) 5日間程度 | 52 | 61.9 |
| (4) そ の 他 | 16 | 19.0 |
| 回 答 な し   | 1  | 1.2  |

### (3) 参加学生の感想

#### 〔男・20歳〕

僕は、この合宿で、「これからの時代は、自分の意見を持ち、それを自信を持って発表でき、且つ行動のできる人が求められる」と感じさせられた。

今までの僕は典型的な日本人で、少しぐらい違っていても、「まあ、まあ皆がそうなんだから、爪を立てず丸く行きましょう」という感じだった。でも、今日、この日から僕は変わることでしょう。

「アジアと九州」というのは、今だに僕にとっては難しく、考えがまとまらない。でも、この合宿で、上述のことを感じとれてとてもよかった。

#### 〔女・20歳〕

大学生というものは、実に自由なものだと感じた。自分から求めていかなければ何も得られず、得られなくても何の不自由もない。

要するに積極的に生活しなければ損だと感じた。議義はもちろん、その他の討議でも吸収したことが質的にも量的にも多かった。人生観が少々変わったかもしれない。

今回は、九州地区だけの大学生だけだったが、是非機会があったら全国の大学生のフォーラムのようなものに参加したい。きっと考え方が違うと思う。

#### 〔女・20歳〕

今まであまり目を向けていなかったこと、あまり考えていなかったことに目を向けさせられたり、考えさせられたりしました。

講義そのものについても、それが言えますし、講義についての討議に関しても、例えば、善と悪の規準は何かとか、少し哲学的なところまで話が及び、他の人の考えを聞くことによって、自分の考えをしっかりとらせたり、改めたりできました。

ほんとうに、いろいろなことを考えました。そういう機会が与えられたことをうれしく思います。  
大へん有意義なものでした。

できれば、来年も参加したいと思いました。

#### 〔女・18歳〕

「地域からの視点」というテーマのもとすごしてきた5日間だが、私にはとても学ぶことや感動することが多かった。私達の大学は特に他の大学との交流が希薄であるので、九州各地の大学生と語り合うことが出来たことは、大きな財産となった。自由討義の時間に皆と様々な事を語り合っていると、この合宿に参加して本当に良かったと、特に実感した。

講義についても興味深いものばかりで、又教官も熱心に講義をして下さったので嬉しかった。白熱した討義や九重の山を登りつめたことなど、沢山の思い出ができたと思う。この合宿共同授業が長く続き、より多くの大学生がこの感動をあげようことを希望する。

#### 〔男・21歳〕

いろんな大学の友だちと話しているとみんなそれぞれ、その大学の雰囲気というのを持っていて、それが、この5日間つきあっていくときに、とても重要な役割を果たしていたように思います。正直に言って、一種のカルチャーショックめいたものを感じました。もしかすると、僕はこの合宿でまた少し変わったかもしれない。そして、話した内容というのも、大変多様で、政治的なものから、恋愛なんかについてまで、いろんな人の考え方を知ることができました。たった5日間だけど、かなり本音でみんなとつき会えたと思います。

それから、日頃つき合いのうすい教官の人たちや、教務の人たちなんかと話しもできたし、それぞれ、みんな立場というものがあって知らない所ですごい苦労があるんだということも知りました。

それと、人と人とのつきあいで大切なものの1つとして、良い意味での、“どんぶりかんじょう”的なものが必要だと思った。あまりにきっちりした感じでつきあうときっとパンクすると思う。

表面的なものではなくて、何か、心の中から拍手が湧きおこるような感覚、これが今回の合宿では何度か感じられたのです。とてもすばらしいことだと思いました。

大学時代の本当によい思い出になると思うし、今から生きていく上での糧になると思う。あと食堂のおばさんたちの親切さにも感激してしまった。

**〔男・18歳〕**

この共同授業において学んだことは、たくさんありました。

まず最初は、九州地域の地理的環境や社会的環境を知ることにより、改めて、自分の住む九州の地域のつながりを知ることができました。またフォーラムなどでは、お互いに意見を述べ合い、真面目にアジアについて考え、欧米以外にアジアとの交流を考えることができました。

そして講義以外では、多くの友人をつくることができ、話し合うことにより、また一歩深く、九州名地のようすがわかりました。

こういうことにより、この授業に参加する以前とは、九州あるいはアジアについての自分が見方が大きくかわったと思います。これだけでも、大きな収穫と自分は思います。

**〔男・19歳〕**

自分の大学は理系なので文科系の先生の話などが聞けたのがよかったと思う。それに大学の講義だと討議の時間が無いので、どうしても受け身になりがちであるが、ここでは討議の時間があるのでいいと思う。

しかし講義に対して討議の時間が近かすぎるので、自由討義の時間をつぶしてでも議義に対する討議の時間を増すべきである。

それから人数が多すぎると思うので、この半分くらいの人数でもよいと思う。

**〔男・20歳〕**

自分と同年代の人が、積極的に意見を発表し、又深い知識としっかりした発言力をもっていることに感動した。

そして、自分が自分の専攻にばかりかたよった知識しかもっていない事を、とても恥かしく思った。

これら以外にも、この共同授業で得たものは多く、今後の自分の生活に生かしていきたい。

## 5. 参加者名簿

### ① 教 職 員

|               |               |                     |
|---------------|---------------|---------------------|
|               | 九州芸術工科大学      | 鹿児島大学               |
|               | 講 師 北 村 賢 介   | 助 授 鈴 木 英 治         |
| 九 州 大 学       | 佐 賀 大 学       | 事 務 官 徳 永 泰 彦       |
| 教養部長 立 田 清 朗  | 助 授 豊 島 耕 一   | 宮 崎 大 学             |
| 教 授 福 留 久 大   | 事 務 官 岸 恵 子   | 助 授 辻 正 二           |
| 〃 安 藤 延 男     | 長 崎 大 学       | 宮崎医科大学              |
| 助 授 陣 内 正 敬   | 助 授 朝 長 昌 三   | 講 師 ロバート・<br>J・アダムス |
| 事 務 官 山 崎 英 一 | 事 務 官 拓 植 喜代志 | 事 務 官 久 保 光 行       |
| 〃 高 治 博 一     | 熊 本 大 学       | 琉 球 大 学             |
| 〃 福 田 義 勝     | 教 授 猪 飼 隆 明   | 助 授 前 門 晃           |
| 技 官 鶴 田 信 義   | 助 授 田 中 廣 滋   | 事 務 官 與 儀 実津雄       |
| 九州工業大学        | 事 務 官 西 野 勝 馬 | 学 外 参 加             |
| 教 授 打 浪 清 一   | 〃 門 築 保       | 版 画 家 木 村 晃 郎       |
| 福岡教育大学        | 大 分 大 学       | 毎日新聞社 篠 原 治 二       |
| 助 授 中 溝 幸 夫   | 助 授 前 田 寛     |                     |



### ② 学 生

|                      |                 |                 |
|----------------------|-----------------|-----------------|
|                      | 10 片 木 寿 之( 経 ) | 3 宮 口 典 子( 教 )  |
|                      | 11 鹿子島 雅 子( 理 ) | 4 松 吉 敏 郎( 教 )  |
| 九 州 大 学              | 12 荘 文 哲( 医 )   | 5 中 村 涼( 教 )    |
| 1 Sadie Bircher( 文 ) | 13 伊 東 啓太郎( 農 ) | 6 戸 次 祥 子( 教 )  |
| 2 長 賢 一( 法 )         | 14 伊 藤 大治朗( 農 ) | 7 三 宅 崇 三( 教 )  |
| 3 西 村 安 博( 法 )       | 15 高 橋 良 次( 農 ) | 九州芸術工科大学        |
| 4 吉 田 和 泉( 法 )       | 九州工業大学          | 1 赤 坂 誠 治( 芸工 ) |
| 5 安 部 憲 廣( 経 )       | 1 高 見 直 宏( 工 )  | 2 鮫 島 康 弘( 芸工 ) |
| 6 仙 波 光一朗( 経 )       | 2 岩 崎 洋 右( 情工 ) | 3 清 水 慶 典( 芸工 ) |
| 7 蔵 本 賢( 経 )         | 福岡教育大学          | 4 八 尋 隆 生( 芸工 ) |
| 8 野見山 裕 二( 経 )       | 1 切 間 久美子( 教 )  | 5 松野尾 浩 久( 芸工 ) |
| 9 黄 益 鉉( 経 )         | 2 永 渕 美 法( 教 )  |                 |

**佐賀大学**

- 1 原田泰幸(理工)
- 2 服部敏弘(理工)
- 3 村谷恵介(理工)
- 4 嘉見博章(理工)
- 5 松尾匡章(理工)
- 6 川島光成(理工)
- 7 東島伸二(理工)
- 8 江崎潤一(理工)
- 9 坂井和徳(理工)
- 10 井田政和(経)

**長崎大学**

- 1 森 豪(工)
- 2 臼井正三(教)
- 3 高橋卓也(経)
- 4 北御門隆久(経)
- 5 山内秀樹(薬)

**熊本大学**

- 1 中嶋りつ子(教)
- 2 徳永裕子(教)
- 3 城戸恵美(教)
- 4 蓮尾優江(文)
- 5 豊野由布子(文)

- 6 谷口恵子(法)

- 7 池永康枝(法)

- 8 光永佳史(工)

- 9 吉本安志(工)

- 10 堀切正俊(工)

**大分大学**

- 1 小島康伸(経)

- 2 光恒陽子(工)

- 3 山本美香(工)

- 4 長友美穂子(工)

- 5 今村武史(工)

- 6 末吉礼明(工)

**鹿児島大学**

- 1 根本はつみ(教)

- 2 保母宏幸(教)

- 3 石田正紀(教)

- 4 稲森 剛(工)

- 5 植島和樹(工)

- 6 河合秀成(工)

- 7 田浦正三(工)

- 8 西幸和雄(工)

- 9 清水盛弘(歯)

**宮崎大学**

- 1 江藤哲博(農)

- 2 竹井和博(農)

- 3 福井宏之(教)

- 4 金谷恵美子(工)

- 5 三輪 了(工)

- 6 田村佳嗣(工)

**琉球大学**

- 1 慶田城 裕(法文)

- 2 桃原致伸(法文)

- 3 長嶺明子(法文)

- 4 糸満 まり子(法文)

- 5 伊禮 ありさ(法文)

- 6 米 嵩 睦子(教)

- 7 柏田清美(教)

- 8 荒川俊哉(医)

- 9 杉山克己(医)

- 10 玉那覇 泉(医)

- 11 野元秀一(工)

- 12 池城隆明(農)

- 13 原島浩一(農)

- 14 世戸伸一(農)

- 15 辻 和久(農)

## 6. 付 録

### 第12回九州地区国立大学間合宿共同授業事務日程

| 年 月 日     | 事 務                                                     | 内 容            |
|-----------|---------------------------------------------------------|----------------|
| 61.11.6～7 | 合宿共同授業委員会                                               | 九州地区国立大学教養部長会議 |
| 11.18     | 企画委員会開催通知                                               |                |
| 12.11     | 企画委員会開催                                                 |                |
| 12.20     | 講義題目等の推薦について依頼講義題目の調整・決定                                |                |
| 62.2.13   | 講義担当教官の推薦依頼及び「講義要旨」の原稿依頼<br>合宿共同授業必要経費(予算要求)について参加大学へ照会 |                |
| 4月上旬      | 予算要求書の提出                                                |                |
| 3.12      | 合宿共同授業実施委員会開催通知                                         |                |
| 4.16      | 合宿共同授業実施委員会開催                                           |                |
| 4.20      | 実施(学生募集等)について通知                                         |                |
| 5.30      | 参加者名簿の提出締切                                              |                |
| 7.11～15   | 実 施                                                     |                |